

## 寄り沿うこと

仲嶺 真弓

9月23日(土)に前期総括職員会議をおこないました。アトム共同福祉会では年2回(9月と2月)、アトム・つばさで働く職員が合同で総括会議をしています。今回も総勢51名の参加で会議を終えました。

テーマは、「安心できる場づくりのために ～タブーをつくらない～」

前期総括会議では、保育施設だけではない外部の方の話を書くことで、職員ひとり一人が外の世界を知り、視野を広げることが必要と考え、ゲストの方をお迎えして学びに変えています。

今回の外部ゲストは、福岡県の特別養護老人ホーム「よりあいの森」「宅老所よりあい」「第2宅老所よりあい」の統括所長 村瀬孝生さんをお迎えしました。安心して働ける職場、安心して子どもを預けられる保育園、それを保障するために必要な「こと」はなんだろう? 「こんな酷いこと思う私は優しくない」「できない自分だと思われたくない」「痛いところまで踏み込んで、嫌われたくない」「世の中ってそういうものでしょ」「もっと、したいけど、みんなと足並み揃えないとダメだよ」などなどて……。

「安心できる保育園」を目指しているつもりなのに、なんで、私たち自身が安心できていないのだろう? 「正直な私は、こう思っている」「本当は、こうありたい」という気持ちにふたをし、行動にブレーキをかけているものの「正体」はなんだろう?

一見、保育園と老人ホームって全く違う世界のように見えますが、村瀬さんのお話を聞いて、全く別世界ではなく、同じようなことで悩みながら、人とともに生きる場の中で、人に寄り沿いながら仕事に向かっている。村瀬さんのお話を聞き寄り沿うってこういうことか、でも自分はそこまで寄り沿えるかなと、自分の母との毎日々、日々の職場での人との関わりを思い出していました。村瀬さんの書籍も読み、時間が経つほどに、心にしみてくる一説がありました。ご紹介させてください。

※村瀬さんは、“添う”ではなく、あえて“沿う”という漢字を使っています。

『介助される「わたし」と介助する「わたし」。ふたりのわたしがひとつの行為を成すのだから、それぞれの「わたし」にさまざまな感情が立ち上がる。そこには、喜びや悲しみ、苦しみや怒りをはらんだ、今を生きる「わたし」がいる。』

同じ行為をただ繰り返しているように思える日常も、同じ日はない。生活というものは、不安定極まりない「わたし」がお互いに関わり合って作り上げている。』

介助という言葉は、いろんな言葉に置き換えられるけれど、「わたし」同士(自分と他者)の関係性は、子ども、保護者、職員同士のどれも同じ。「わたし」をどう語るかで関係性も変わる。テーマの一部、“タブーをつくらない”は、これきいたらあかんかなあ… など心の弦きにブレーキをかけたりふたをしたりせず、ありのままの「わたし」を語り合えることが、真に安心できる場がつくられる。そんなことを、学ぶことができた前期総括会議でした。

## フリースペースひだまり

今年度から、地域の子育てひろばはほとんど予約が必要で、決まった時間に準備していく必要があります。もっとふらっと子どもと立ち寄りたいたいそんな家庭保育の母たちの声を拾いました。つばさのふれあいルームを利用して毎週水曜日の午前中に、フリースペース“ひだまり”を開設しました。始まってみると利用家庭ゼロの日はなく、地域担当職員への相談、利用者同士の交流もあります。つばさが丘北地区の子ども会がなくなり、譲っていただいたおもちゃもたくさんあり、つばさ文庫の本もあり、子どもが自由にさわってもよいピアノ(地域の方からいただきました)もあります。遊ぶスペースとしては十分な環境なので、家庭育児の親子も孤立しない、子育ての地域の拠点の一つとして役割を果たす場になればと思います。